

懲りない面々

小樽商科大学で、学生の飲酒を巡る不祥事が発生し、1人は依然として意識不明の重体となっています。

今回の不祥事は、同大学のグラウンドで花見目的のバーベキューパーティーを催して飲酒していた、アメリカンフットボール部員60人の内9人が急性アルコール中毒とみられる症状で病院に搬送されたというもので、その内の7人は未成年でした。

小樽商科大学では、一昨年6月にも未成年のサッカー部員10人に飲酒させるなどしたとして2～4年生の部員25人を停学処分にするると共に、部活動も翌年3月まで停止させるという措置を講じています。また、こうした事態に危機感を抱いた大学側では、学生に対して、過度の飲酒の怖さや未成年は飲酒禁止であること等について指導してきたとのことですが、にもかかわらず再び飲酒を巡る不祥事が発生したことは誠に遺憾です。

北海道新聞の社説では「悲劇をもう繰り返すな」と書いていますが、今回の不祥事に「悲劇」という言葉をあてることは如何でしょうか。何故なら、今回の不祥事は、不可抗力で発生したものではなく、当然避けることが出来たはずであり、それだけに学生自身の責任は極めて重大です。

これまでも、度々飲酒による事故が発生し、最悪の場合は死亡事故まで起きているのに、何故同じことが繰り返されるのでしょうか。

根っこにあるのは、日本の社会は比較的「酔っぱらい」に対して寛容であり、それがまた、「酔っぱらい」自身の甘えにも繋がっているように感じています。勿論、「酔っぱらい」に対する世間の目は昔と比べると随分厳しくなっているのですが、「酔っぱらい」の方には、「酒の上でのことなら大目に見てくれるだろう」という甘えが、依然としてあるように感じています。

そうはいつでも、大学側では、学生に対して飲酒に関する指導をしてきたわけで、それにもかかわらず再び不祥事が発生したのは何故でしょうか。

今回の不祥事については、学生に第一の責任があることは当然です。規則がどうであれ、大学側からどんな指導があろうと、自分たちはやりたいことをす

るというのでは、判断力は子ども以下であり大学生を続ける資格もありません。

学生達には、「あなた方は自由をはき違えている」と申し上げたいと思います。少なくとも、酒の上のことなら何でも許される時代ではなくなっていることを肝に銘ずべきです。

下級生に酒を強要し、結果、死亡事故に繋がるような事態になったら誰が、どういう責任を取るつもりだったのでしょうか。勿論、当人達の中でそうしたことを考えた形跡はありません。情けない限りです。

また、今回の不祥事に関しては、大学側の指導の甘さも否定できません。小樽商科大学は自由な校風が持ち味で、前回の不祥事が発生した後も「学生の自主性を尊重する」との理由から、学内での飲酒は禁止せず、売店でもビールやワインを販売してきたといえます。

今日、殆どの企業では、職場内での飲酒を禁止していると思います。道庁でも相当以前から、職場での飲酒は全面禁止になっています。大学が、校内での飲酒を禁止もせず、しかも売店で酒を販売しているというのでは、大学側の指導が甘く見られても致し方ありません。

「学生の自主性を尊重する」といいますが、教育機関である以上、学生がやらねばならないこと、また、やってはいけないことについては、場合によっては学生に強制してでもそれを守らせる必要があります。「自主性を尊重する」という美名のもと指導に徹底を欠くというのでは、大学側の責任放棄という誹りは免れません。

小樽商科大学におかれては、今回の不祥事に対して厳しく対処すると共に、徹底した再発防止策に取り組んでいただきたいと思います。

(塾頭 吉田 洋一)